

真夜中の露出

深夜の一時、家族が寝静まるのを待った私はジャージとTシャツというラフな格好に自撮り棒とスマホを持ち、家族を起こさないように部屋を出ます。

弟の部屋の隙間から光が見えるあたり、中学一年生の弟はまだ起きているみたい。本当は家族全員が寝静まるまで待ちたかったのですが、いい加減待てません。

まったく弟はこんな夜中まで起きて何をしているのでしょうか？　ちなみに姉は、裸で外を歩こうとしています。

足音に気をつけ、暗闇の中階段を降りる私。玄関で私のクロックスを調達し、一階にある目的の部屋まで辿り着きました。そして掃き出し窓の近くまで歩き、クロックスを置き、音を立てないよう細心の注意を払いながら掃き出し窓の鍵をゆっくりゆっくり開けます。掃き出し窓を開けると、生暖かい風が部屋に入ってきて、外なのだな。ということを改めて実感し、おまんこがキュン♡と反応しました。

さあ、ここで今回私がやる、計画の全容を説明しようと思います。

私の家から五十メートルくらい離れたところのアパートの近くに、自動販売機が置いてあります。私は、そこで記念撮影をし、ジュースを買うのが今回のミッションです。

これだけならとても簡単なミッションです。しかし私は、このミッションを全裸で行うのです。ふふふ、興奮してきました。

スマホと自撮り棒を持って全裸で家を出て、全裸で道を歩き、全裸で自動販売機の前で記念撮影をし、全裸でジュースを買い、全裸で家まで帰ります。

やばいです。考えただけで興奮します。私は天才なのでしょうか？

部屋の入りの口の方を一回見て人がいないことを確認すると、私は意を決し T シャツを脱いでしまいました。

私は寝る時ブラジャーをつけない派なので（別に胸がないからではないよ。つけない派なだけだよ）、もう上半身は裸になっています。おっぱい丸出しです。

そしてもう一度部屋の入り口の方に視線を向け、改めて誰もいないことを確認します。犯行は慎重に実行せねばなりません。

今度はパンツとジャージをいっぺんに脱ぎ、すっぽんぽんになりました。

はあはあはあ♡、早く野外露出したい衝動が抑えられず、一気に脱いでしまいました。ダメですよ、私。慎重に、慎重に、です。

全裸になった私は、もう一度部屋の入り口を確認し、家族が起きていないこと（弟除く）を確認します。誰もいません。誰もいません。誰もいません。

私は高鳴る鼓動を押さえつけ、外にクロックスを置きました。

大丈夫です。まだ、家の敷地の中。恐れることはありません。

私は自分を鼓舞すると、外に置いたクロックスを素早く履いて、全裸でスマホと自撮り棒を持ち、ついに外に飛び出しました。

すると、私のおまんこに外の風があたり、それだけで少し感じてしまいます。

ひゃん♡、まだ家の敷地内だというのに、胸の高鳴りが止まりません。

そして足音を立てないように、狭い庭を通り、家の正面入り口まで向かいます。

正面入り口まで行くと、私は公道をキョロキョロし、誰もいないことを確認して、深呼吸をします。ふふふ。

ついに私は、全裸で公道に出てしまいましたぁ♡

あ、やばい、もし警察に見つかってしまったら、私、猥褻物陳列罪わいせつぶつちんれつざいで捕まっちゃう。

変態です。

長谷川涼子は変態なのです！

高まってきたので、スマホを自撮り棒にセットし記念撮影することにしました。

家の前で右手を目の横でピースして、カシャッと自撮りする全裸の女子高生。ぐふふ、私ったら、自分の家の真ん前で、裸でピースして記念撮影しちゃいました。最低です。お父さんとお母さんが頑張って三十年ローンを組んで建てた大切な家の前で、私は全裸記念撮影しちゃいました。ごめんなさい。親不孝な娘でごめんなさい。

全裸記念撮影を終わらせ、私はゆっくり歩きだします。

最初の方は、右手でおまんこ、左手でおっぱいを隠しながら、歩いていました。しかし、あれですね。おっぱいやおまんこを隠しながら歩くことに意味はあるのでしょうか？ だって、人に見つかってしまったら同じじゃないですか。

でも、もし誰かに見つかった時、おっぱいとおまんこを恥ずかしそうに隠しながら歩いていたら、言い訳はできそうですね。誰かに命令されてイヤイヤとか、誰かに服を盗まれてしまつてとか。

対して、おっぱいとおまんこを隠さずにどうどうと歩いていたら、この子おっぱいとおまんこを見せつけている変態だわ！ となつてしまいそうです。

変態。そうですね。綺麗なお姉さんに蔑んだ目で変態って罵られたいかもしれません。綺麗なお姉さんいないかしらと、あたりをキョロキョロ見回してみますが、誰もいません。

というか、誰かいたら困るのですけどね。

実は私、自分の裸体に自信があつたりします。

まず、おっぱいですが、毎日のオナニーで鍛え上げられているだけあって、エッチなおっぱいなのですよ。

私のささやかなつぼみに、いっぱい舐めて！ と頑張つてピーンと伸びた乳首。思わず舐めなくなっちゃう可愛さがあります。あと美味しそう。舐めるときっと美味しいです。そして、新品未使用の私のおまんこ。中身はもちろん綺麗なピンク色です。多分、名器ですね。私のおまんこは。ふふふ。

ああ、将来エッチした男性みんなに、涼子は百年に一人の名器だと持て囃され、そして私はモテモテです。ぐふ、ぐふふふふふ。

何か別のことを考えながら歩いていると、街灯の下にある自販機がどんどん近づいてきました。

案外何もなくてここまで来てしまい少し拍子抜けです。

しかし、自販機の近くが正直一番の難所なので、ここで気を抜いてはいけません。

自販機の近くには、わかば荘という、ぼろっついアパートが立っています。

そこは一人暮らしの大学生が多いので、けっこう夜中に出歩くような人が住んでいそう

な危険なアパートなのです。

私は警戒レベルをマックスにして、あたりをキョロキョロ見渡します。

誰もいないのが確認されると、自然と右手はクリトリスの方へと導かれます。

しょうがないですね。

ちよつと興奮して、感じ始めちゃったのですから♡

「んっ、あっ♡」

とクリトリスの刺激で思わず卑猥な声が漏れてしまいます。

あーちよつとヤバイかもしれません。

私は逝くのを抑えながら、なんとか自動販売機の所まで到着しました。

あたりを見渡し誰もいないことを確認すると、私は自動販売機まで全裸で来た記念に自撮り棒にスマホをセットして記念撮影することになりました。

スマホには、自動販売機を背景に、少し首を傾げイエーイとピースし、ぎこちなく笑う全裸の女の子が写っています。

ふふふ、なんですか、この目をとろんとさせて恍惚とした表情をしているエッチな女の子は。

うー、スマホに写る自分の顔をみていると余計に興奮してきました。

カシャッと写真を撮影し、一つ目のミッションを終わらせた私は、そのまま二つ目のミッションであるジュースの購入に取り掛かります。

電子マネーで代金を払いスポーツ飲料のボタンを押すと、ガタンとペットボトルが落ちてきて、二つ目のミッションを無事完遂。

「ふうー」とおでこを拭い軽い達成感に包まれた私は、スマホと自撮り棒を地面に置き、手はおまんことおっぱいを自然と触り始めます。

正直、けっこうお預けをくらっていた私はもう限界でした。

ガニ股になり、右手でクリトリスを摘み、左手で乳首を刺激し、コリコリする私。

「んっ、ああん♡」

と思わず声が漏れ、おまんこからはエッチな汁がどんどん出てきます。

「ああん♡、ヤバイ♡、いっちゃう♡♡」

と、ガニ股で一心不乱にクリトリスと乳首を刺激し、

「あんっ♡、あっ♡、あっ♡、あんっ♡♡♡♡」

と高まりが最高潮に達した私は、おまんこから、プシャーとエッチな汁を噴射しました。



そして、自動販売機にもたれながら、ペタンと地面にお尻を着けへたりこみます。

まどろみの中、じょつろろろろろーと尿道から漏れ出る液体。

「うっ、また漏らしてしまった」

と、羞恥に悶える私。これは本当に治さないとダメです。彼氏ができてエッチした後毎回漏らしていたら、下手したら振られちゃいますよ。

もしくは、お前漏らすしベッドではエッチしないわって言われて、いつもエッチはトイレでしかできなくなってしまうかもしれません。そう、私は肉便器。

変態な私は逝った後も、なんとなく両手の指で乳首を親指と人差し指で摘み、なんとなくコリコリコリつと乳首に刺激を与えながら、自動販売機にもたれかかり目を閉じ休んでいると、近くでガチャ、ボタンという戸が開かれた音がしました。

私の心臓はドクンと跳ね上がります。

ヤバイよ、ヤバイよ、ヤバイよ。わかば壮の住人の誰かが、外に出てきちゃったよ。

私はドクンドクンと脈打つ心臓を抑えながら、スマホと自撮り棒だけを持ち咄嗟にわかば壮の入り口の反対側の自動販売機の影に隠れます。

ううう、来ないで、来ないでよーと祈るように自販機の側面で丸くなる私。こんなところ見られたら一巻の終わりです。

たったったたつと近づいてくる足音に、私の心臓は跳ね上がります。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

深夜とはいえ、こんな格好でお外歩かなければ良かったよーと後悔がとめどなく襲ってきますが、後の祭り。

たったったたつと、どんどん近づいてくる足音に、私は終わりを意識し始めました。あつ、無理だ。

扉が開いた音がした瞬間に、走って家まで逃げ帰らなかった自分の判断力の甘さを呪います。

咄嗟のことで、どこか物陰に隠れなきゃという意識しかありませんでした。

うー、こっちは来ないでよー、と手を頭の上で合わせ、おでこを膝に当て、顔を隠し体育座りをして祈る私。せめて、自販機のある道とは反対側の方に行って、お願いします。

と祈る私をあざ笑うかのように、足音はどんどん近づいてきました。

これ完璧に私の方の道向かって来ています。

終わった。本当に終わった。

私は、絶望しながらも、運よく自動販売機の側面に隠れている私は見つけられないで。と祈ることしかできません。ずっと、祈ったことと逆のことにしかなくてないのだから、今回

くらいはお願い聞いてください。お願いします。

そして、たったたつたつという足音が私の近くで止まりました。

えっ、嘘でしょ。見つかったの？ 見つかってしまったの？

という最悪の事態を想像しながら、私は自販機の側面で心臓をバクバク鳴らしながら、丸くなって顔を隠し、絶望していました。

しかし、自販機からチャリーンガチャガチャ、チャリーンガチャガチャとお金を入れる音がし始めます。

あれれ？ これ、奇跡的に見つかってないのではないのでしょうか？

どうやら自販機でジュースを買っているみたいです。そして、ガタガタと缶が落ちる音がします。

「あれ、スポーツドリンクが入っている」

と疑問の声を漏らす男性の声。

うわー、それ私買ったやつだ。お願いだから辺りを見渡したりしないで。なんで、スポーツドリンク回収しなかったのよ。私のバカバカバカ。と後悔の念に苛さいなまれていると

「ラッキー、貰っちゃお」

という男の声。

うん？ 本当にそれで良いのですか？ どの誰が買ったかもわからないスポーツドリンクですよ。怖くないですか？

しかし、この男の危機意識？ がめつさのお陰であたりを見渡したりせずにスポーツドリンクを我が物にしたのは助かりました。お陰でバレずに済みそうです。ありがとう神様。「うん、なんだ、ここ濡れているぞ」

と神に感謝をしていた私に新たな試練が降りかかります。

おそらくその濡れているのは私の愛液とおしっこです。

きゃー、愛液とおしっこ男性に見られちゃったよー、と羞恥心がこみ上げると同時に危機感を覚え始めました。

ヤバイですねこれ。なんでこんなところにおしっこがなんて思い始めて自販機の周辺を調べられたら終わりです。見つかったやいますよ。し、しかも、おもらしの犯人が私だとバレてしまうおまけ付きです。と少し泣きそうになりながら、私は顔を少し横に向け、自販機の前にいる男に目をやりました。

男は、しゃがんで、指で地面に落ちている私の愛液とおしっこを触ると、その指をペロッと舐めました。

ギャー、何をしているのですか、この人は。信じられない。今、私の愛液とおしっこ舐

めましたよ。やばいですって、頭おかしいよ。

「うん。リンゴジュースの味がする」

と、呟く男。なんだそれは、嘘つけ。

なんで私のおしっこがリンゴジュースの味がするのよ。今日一日リンゴ食べてないし、リンゴジュースも飲んでないよ。というか甘いのか？ えっ、糖尿病予備軍とかじゃないよね？ ちょっと別の意味でも怖くなってきたのですけど……

おしっこ甘い疑惑に恐怖している私をよそに、男は私の買ったスポーツドリンクと自分で買ったジュースを持って、わかば壮へと帰って行きました。

助かった。私は安堵すると同時に、近所に変態が住んでいたことに対し危機感を覚ええます。今度わかば壮の前を通る時は気を付けよう。私は人知れず誓いました。

そろそろ家に帰ろうと思い立ち上がると、私のおまんこの下の地面は濡れていました。自販機の前まで男が来た時怖くなって少し漏らしてしまったみたいです。恥ずかしい。気づけば、自販機の周りが私のおしっこでマーキングされています。あとわかば壮側の側面にマーキングすればコンプリートですね。この自販機は私のもの、フッフッフッフ。というか、私漏らしすぎですよ。

これDNA鑑定したら、犯人は長谷川さん家の涼子ちゃんみたいな感じでバレたりしま

せんよね？ 大丈夫ですよ？

ちよつと怖くなった私は、とりあえず走って家に帰ることにしました。

お外で露出して、自販機の前でオナニーまでしたので割と満足しました。ヤバイ男性は目撃してしまいましたけど……

家の正面に着いた私は、少し息を整えた後、足音が聞こえないよう狭い庭を通ります。物音を立てないように、抜き足差し足忍び足で移動し、家を出た掃き出し窓のところまで辿り着きました。

ドキドキした真夜中の露出もこれにて終了。

私は、今日の思い出を記録に残すべく、最後に記念撮影することにしました。

自撮り棒にスマホをセットすると、右手でピースして自撮りするべくスマホを軽くのぞき込み、カシャッと撮影します。

ふうやり切りました。途中すごく危ない展開もありましたが、なんとか乗り切りました。私は達成感を噛みしめながら、掃き出し窓から家に入るためにくると半回転します。するとその先に、なぜか弟が立っていました。

ふえええええええ。嘘でしょ。なんで弟がこんなところにいるのですか。お外で全裸自撮りしているところ見られちゃったのですけど。どどど、どうしょ。どうしよう。

「そんな格好で何してんの？」

ああああああああ、聞かれたくないことを真っ先に聞かれてしまった。

何か、何か答えなくては

「じじじ、自撮りしていました」

と、あわあわしながらやっていたことを答えるのですが、問題はやっていることより、格好と場所だと思います。

そう。なんで庭の外で裸になって自撮りしているのだということ。

ううう、何か良い言い訳を早急に考えなくては……

「裸で？」

と言われ、今更ながら私は右手と右腕でおっぱい、左手でおまんこを隠します。というか、さっさと隠せ私。弟におっぱいもおまんこも完全に見られてしまったではないか。バカバカバカ、ううう、ヤバイ、恥ずかしい、死にたい。

「だっ、ダイエットの成果を写真に収めようかと思ったの。あの、恥ずかしいからあんまり見ないで」

と、なんとかそれっぽい言い訳を思いつき話しますが、この言い訳で大丈夫でしょうか？

不安です。すごく不安です。

「ふーん、ダイエット。お姉ちゃん別にダイエットしなきゃいけないほど太ってないと思うけどなあ」

と言いながら私を凝視する弟。

ひゃあああああああ、だから見るなと言っているだろうバカ。お姉ちゃんの裸に興味あるのは分かるけど、凝視とかやめてよ。血の分け合った弟とはいえ、恥ずかしいでしょ！
「なんか胸、絶壁じゃない？」

んっ？ 聞き間違いかな？ なんか凄く酷いこと言われた気がします。

今、私のおっぱいのこと絶壁って言いませんでした？ いや、親愛なる優太君に限って、私のことを絶壁呼ばわりするとは思えません。多分聞き間違え。

「ん？ 今何か言いました？」

と聞こえなかったことにします。そもそも私のおっぱい絶壁じゃないですし。ささやかではあります、ちょっと膨らみありますからね。

「いや、お姉ちゃんのおっぱい、普段もつとあった気がしたから。実際に見たら、小六の時とあんまり変わって無かったからびっくりして」

おい、言い直すな。あと、小六の時の私と大差ないってどういうことだ。小六の時の私

とか、本当のつるぺったんだぞ。

「優太君、もう遅いので寝ましょう」

と私は張り付いたような笑顔で優しく弟に提案しました。

弟も私の怒りを感じ取ったのか、

「えっ、あつ、うん。おやすみ。姉ちゃんもさっさと服着て寝なよ。風邪ひくよ」

「ええ、おやすみなさい」

と言い、弟と別れました。それにしても絶壁って……

私は自分のおっぱいに目を向けます。ささやかではありますが、多少は膨らんでいる私の乳房。

「ちよつとは膨らんでるじゃん。絶壁じゃないもん」

と一人暗闇の中で呟き、両手で自分のおっぱいをモミモミする私。

揉んだら大きくなるって、本当かしら？



昨日は興奮しました。深夜に全裸でお外を歩き、自動販売機の前で記念撮影した後激しくオナニー。

私のおしっこを舐める、妖怪おしっこ舐め男には恐怖しましたが、なんとかバレることなくミツシヨンコンプリート。

弟に全裸記念撮影しているところを見られてしまいました。が、大事には至らなかった？ので、まあOKにしましょう。

しかし、年頃の姉のおっぱいを見て絶壁呼ばわりは許せませんけどね。

朝七時、昨日遅くまで野外露出していた私は、少し寝不足の気だるさと闘いながら、そのそと制服に着替え、トイレを済ませてから洗面所に向かいます。

洗面所の鏡を見ながら軽く髪を結び、顔を洗うとリビングに向かいました。リビングに入ると、私以外の家族はすでに席についています。

「おはよう」

と挨拶すると、家族からも「おはよう」と挨拶が返ってきました。

私は挨拶を済ませると、弟の正面、母の横のいつもの席に座りました。

あの、あれですね。明るい所で弟の顔を見たら、昨日のことが思い出され目を逸らしてしまいました。ううう、恥ずかしい。対する弟は、私を凝視しています。

ちよっと、やめなさい。昨日のお姉ちゃんの裸を思い出してしまつて興奮してしまう気持ちには分かりますが、そんなに見つめないで。お姉ちゃん恥ずかしいです。

「姉ちゃんさ、偽乳なの？」

んっ？　今なんて言いました？　お姉ちゃんの聞き違いかなー？

「優太どうした急に」

「そうよ、優太。デリカシーのない質問はやめなさい。仮にそうだったとしてもお姉ちゃんに失礼でしょ」

お母さん。優太君を叱ってくれるのは良いのですが、今、仮にそうだったとしてもって言いました？　えっ？　もしかしてバレてる？　バレてるの？

「いや、だって、絶対おかしいもん。こんなおっぱい大きくないって姉ちゃん」

おい、弟よ。朝の会話の第一声がそれか。あと、昨日の全裸自撮りの件、親の前で絶対言うなよ。言ったらキレルよ。私は、弟を睨みつけます。

「いや、お父さんいつも涼子のおっぱい見ているけど、涼子のおっぱいはいつもこれ位だぞ」

「えっ、あつ、うん。そうだね。ちょっと、優太君が急に偽乳扱いしてきてビックリしている」

と私はお父さんに相槌を打ちますが、お父さんチラッと物凄く気持ち悪いこと言っていますよ。しかも節穴だし。

ほら、お母さんも今の問題発言聞いて、ジト目でお父さんのこと見ていますよ。

「いや、だって、昨日姉ちゃんがおっぱい見せつけてきたんだけど、悲しいくらい絶壁だったんだもん」

おいおいおいおい、私が優太君におっぱい見せつけにいったって、どういう話だ。あと、絶壁言うな。悲しいくらい絶壁って言うな。あつ、今、心の涙がこぼれた。

「涼子、優太におっぱい見せつけに行ったってどういうこと？」

と、母が私に問うてきた。ひいー、心持ち怒っている気がするのですが。怖い。お父さんへの怒りついでに私にぶつけてきてないですか？

「ちょっと待って下さい、なんで偽乳の私が、弟におっぱいばらして、偽乳なの自ら暴露しなきゃいけないのですか、おかしいですよ」

「あんた、偽乳なのは認めるのね」

ぎゃああああああ、地雷踏みました。というか、なんで親に偽乳バレなきゃいけないの

ですか。酷すぎます。うっ、辛すぎて涙が……

「あの、ちよつとトイレに」

「あっ、逃げた」

うるさい優太。覚えていろよ。私は心の中で号泣しながらリビングを出ました。

しかし私はトイレには向かわず、階段を上り自分の部屋に入ります。

そして、自室のクローゼットから自分のパンツを取り出し、ニヤリと黒い笑みを浮かべました。そのままパンツを持って玄関に置いてある弟のかばんを開けると、私のパンツを弟のカバンの中に入れます。

フッフッフッフ。天罰です。天罰が下りました。

学校に着いたら、カバンの中のお姉ちゃんのパンツに驚き、そして周りのクラスメートに見られていないか、顔面蒼白にしながらキョロキョロするが良い。

私を怒らせると、ただでは済まないのだよ。フハハハハハハハ。



俺の名前は長谷川優太^{はせがわゆうた}。現在中学一年生。部活はバスケット部に入っている。

俺には三歳年上の姉がいる。俺はたいして思わないけど、家に遊びに来た友達が、優太のお姉さんめちゃくちや美人だよな。羨ましいってけっこう言われたから、一般的にはけっこう美人の部類みたいだ。

運動はまったくできないみただけど、高校は県でも上位の進学校に通っているし、対外的には自慢の姉だ。自慢の姉なのだが、俺の前ではけっこうなポンコツ姿をよく晒す。昨日の夜だっそうだ。俺が何か飲み物を飲んで寝ようかと思っ一階に降りると、空き部屋の方でカシャっというシャッター音が聞こえ光った。

不審に思い、空き部屋に向かうと、月明かりに照らされ全裸で自撮りする姉の姿が……びっくりして何をやっているのか聞くと、あわあわしながらダイエットの成果を写真に収めていたと言出す姉。いや、自分の部屋でやれよ、そんな格好で自撮りするなら。一応敷地内とはいえ外だからね。そこ。

それで振り返った姉ちゃんの裸を見てしまった訳なのだけど、あの、おかしいんだよね。俺のイメージ上の姉は割とおっぱいあったんだけど……少なくとも貧乳ではなかった。で

も、目の前にいる姉には、悲しいくらいおっぱいがなかった。

姉の裸とか俺が小学校三年の時に一緒に風呂に入っただけが最後に見た姿だったのだけど、その時と殆ど変わってなかった。

姉のおっぱいがあまりにも哀れだったので、つい口を滑らして、「絶壁おっぱい」と言ってしまったら、姉ちゃんちよつと不機嫌になっちゃったから軽く言い訳して別れた。

次の日の朝、昨日は変なものを見てしまったし、少し気まずいなあと思いながら朝食の席につく。

少し時間をおいて、姉ちゃんがおはようと言って、眠そうに登場した。正面に座る姉の胸に目が行くが、おかしい。おっぱいがある。

昨日あれだけべったんこだった姉に突如現れたおっぱい。一日でそんなに成長したのか？ 否、そんな訳ない。

「姉ちゃんさ、偽乳なの？」

と思わず口走ってしまった。両親に怒られ、ちよつとむきになってしまった俺は、さらに姉に追い打ちをかけた。するとバカな姉は勝手に地雷を踏んで暴露して、涙目で逃走していった。

残念な奴だ。

でも、朝はやりすぎたなー、帰りにお菓子でも買って謝ろうかなー。とか考えながら教室に着いた俺は、とりあえず自分の席に着く。

友達におはようと挨拶されたから、おはようと返し、カバンの中身を机に入れていく。その時、一枚の布がカバンの中から床に落ちた。なんだろうと思って拾い上げて見ると、黄色の綿の布で、中心に可愛らしいピンクのリボンがついていた。んっ？ これパンツじゃね？ と気づいた瞬間、俺はびっくりして、顔を真っ赤にしながらパンツを後ろに隠した。

えっ、ちょっと待って、なんで、俺のカバンの中にパンツが入ってんの？

というか誰のパンツだこれ？ ヤバイってこれ。しゃれにならないレベルでヤバイよ。

「長谷川、挙動不審だけどどうしたんだ？」

「えっ、イヤ、別に何でもないよ」

と汗をダラダラ流して答える俺。客観的にみて挙動不審だ。

すると後ろから、

「長谷川君後ろに持っているのはなにー」

という女子の声が聞こえた。

ちょっと待ってくれ、女子はまずい。女物のパンツ握りしめている男とかヤバすぎる。と、パニックを起こしている俺の背後から、同じバスケット部の友達があらうことか俺の手からパンツを奪い取る。

白日の下に晒されるパンツ。

そのパンツは家の洗濯物の中で見たことのあるパンツだった。

あのパンツ、姉ちゃんのパンツだ。

「うわっ、女物のパンツ」

「きゃー、変態」

と騒ぎ出す女子。

俺は最悪の事態に備え、身を切る思いで発言した。クラスメートの女子のパンツを盗んで隠し持っていたかと思われたら人生終わりだ。

「ちっ、違う。それ、俺の姉ちゃんのパンツだから」

「姉のパンツ学校に持ってくるってどういうこと？」

「きもっ」

「シスコンかな？」

という容赦のない声

「これが、長谷川の姉ちゃんのパンツか」

と言って、パンツを凝視してくる友達。

そして俺のあだ名がシスコンパンツになった。

ぐおおおおお、許せん。許せんぞ、バカ涼子。

俺は羞恥心で顔を真っ赤にしながら、姉への怒りを募らせた。絶対に許さない。



弟に仕返ししたら、スッキリした。

親の前で私の偽乳をばらすとはいったいどういう見だ。

まったくもう。と、怒りを覚えながら、ラフな格好でリビングのソファに寝転がり小説を読む。

すると、今日は部活がなかったのか、弟が早くに返ってきた。小説を読みながら、リビングに入ってくる弟を一瞥し、

「お帰り」

とだけ声をかけて、ドキドキしながら小説に目を戻した。

学校ではどうだったのかな？ どうだったのかな？

「お帰りじゃないだろうーが」

と怒りモードの弟に、どうも私のイタズラは成功したみたいだ。どうだ！ この私に楯突くところなるのだぞ。

ホホホホホホホホ

と心の中で高笑いをする。

「ふがつ」

顔に何かぶつけられた。

私は小説をソファに置いて、両手でぶつけられたモノを顔の前で広げてみる。

それは、今日私が弟のカバンに入れたパンツだった。

「学校でねーちゃんのパンツみんなに見られて、あだ名がシスコンパンツになったじゃねーか、どうしてくれるんだよ」

「ちよつと何、お姉ちゃんのパンツ学校で晒しているのですか。そのパンツは優太君の観賞用ですよ。それで、お姉ちゃんのパンツの評判はどうだったのですか？」

「きもがられたよ」

「えー、私のパンツがきもがられたみたいない言い方はやめてくださいよ。きもがられたの

はシスコンパンツ君のほうですよ？ ふふふ」

と、いい気になってからかつてみたけれど、優太君こぶしを握り締めて肩をわなわなと震わせています。おっと、これは本気で怒っています。ちょっとやりすぎたか。

「おい、昨日のことお母さんに言うぞ」

「昨日のこととはなんでしたっけ？」

「姉ちゃんが、夜中に庭で全裸自撮りしていたことだよ」

「あらら？ お姉ちゃんそんな破廉恥なことしていませんよ？ お姉ちゃんのこと好きすぎて夢でエッチなことしているお姉ちゃんができちゃったのですか？ ふふふ、まったくシスコンパンツ君ったら」

「うるさい絶壁」

「ん？ 何か言いました？」

「小学生のころとんでも体型変わってないじゃん。絶壁、幼児体型」

「かつ、変わってるし、失礼ですよ。女の子に向かって絶壁とか、幼児体型とか。とか変わってないのはシスコンパンツ君の方なんじゃないですか？ ちゃんとあそこの皮剥けていますか？」

「うるさい」

「あらあら、まだ剥けてないのですか？　なら大好きなお姉ちゃん剥いてあげましょうか？」

と、私が弟に近づくと、弟は後ずさり

「もう、姉ちゃんとは絶交だから。二度と話しかけてくるな」

と、捨て台詞を吐いて、弟は逃げていきました。

ふふふ、私の勝ちみたいです。

しかし、それから本当に口をきいてもらえなくなってしまったブラコンの私。

毎晩弟の部屋の前で正座して、何でもするから許してくださいと三日間毎日謝り続けるという悲しい未来が待っていることを、この時の私はまだ知らない。